

2022年度年末手当の会社回答に対する抗議声明

11月11日、会社は申6号「年末手当等に関する申し入れ」に対し、「基準内賃金の2.4ヶ月分に20,000円を加えた額とする」という低額回答をおこなった。あまりにも組合員・社員の労働実感・生活実感とかけ離れており、到底納得のいく回答ではない。

職場からは「低すぎて声が出ない」「半年間の頑張りが2万円なのか。社員を馬鹿にしている」「施策を担い黒字に戻ってきた社員の努力に報いていない」「人間味がない」「頑張ろうとは思わなくなった」「会社を辞めたくなった」といった怒りの声が噴出している。

私たちは、コロナ禍で固定費がかさむ構造的欠陥が浮き彫りとなり、急ピッチで進む会社施策に立ち向かい、変化する労働環境と過去最高の働き度のなかで安全・安定輸送を確保し、黒字経営へと押し上げてきた。そして、こうした労働実感と昨年の定昇カットと期末手当の大幅カットに加え、物価高で苦しんでいる生活実感を団体交渉で粘り強く訴えてきた。しかし、会社はこうした組合員・社員の声を「受け止める」と言いつつ努力に報いない低額回答を示したのである。会社はいったいどこを見て経営をしているのか。「回答書」からは社員に対し「馬車馬のように働け」といったメッセージしか受け取れない。

今、横浜支社管内では安全文化が揺らいでいる。11月9日には鎌倉車両センター所属車両の検査切れという省令違反が発覚した。急遽逗子駅構内に取り込み十分な設備のない中で苦勞しながら検査をおこなっているが、横浜支社始まって以来の重大事象である。相模線では、3月のダイヤ改正でワンマン化されて以降、ワンマン運転に起因する事象が後を絶たない。相模線の乗務員は無人駅化とワンマン化により、運転士・車掌・駅員の一人三役を強いられている。20秒という短い停車時分のなかで切れ目のない基本動作を行い、安全を担保しているが限界がきている。また、12月1日から実施予定のポイント不転換に対する処置として、ディスプレイにより転てつ器内の異物を取り除くことが定例訓練等で説明されている。しかし、転てつ器の構造も理解されていない指導ならざる指導で、社員の大げがにつながりかねないことから組合員が指摘し、訓練内容が見直されているのが現状だ。

会社は団体交渉のなかで、「新型コロナウイルス感染症の影響が続く中、安全・安定輸送、質の高いサービスの実現、様々な努力があったからこそその決算」と第2四半期の黒字決算について述べている。安全はJR東日本にとってトップ・プライオリティであり、安全なくしてすべての収入にはつながらない。労働強化が進む中、必死で安全を守っているのは誰なのか。会社は認識すべきである。そして、組合員・社員の並々ならぬ努力に報い、低額回答を撤回し、満額回答すべきだ。

私たちは、組合未加入者の声を含め6000件以上の声を訴えてきた。しかし、会社は「目標に達していない」「先行き不透明」というスタンスを変えることはなかった。なぜなら会社は、私たちの声を社員の1割の声としか見ていないからだ。未加入者がいくら私たちを通して声をあげたとしても会社には響かない。会社に職場現実を訴えただすことができるのは労働組合しかない。未加入者のJR東労組への結集でしか賃金および労働条件の改善は勝ち取れない。今こそ、JR東労組に結集し、共に声を上げ、会社の経営姿勢に立ち向かおう！

以上、会社の低額回答を許さず、満額回答を求める抗議声明とする。

2022年11月12日
東日本旅客鉄道労働組合横浜地方本部